

日本中国学会第70回大会 開催報告

大木 康
東京大学

2018年10月6日(土)、7日(日)の両日、東京大学駒場キャンパスにおいて、日本中国学会第70回大会が開催されました。10月とは思えぬ30度近い暑さには悩まされたものの、両日とも好天に恵

まれ、420名にのぼる参加者をお迎えし、何とか無事に会を終えることができました。まずはこの場をお借りして、ご参加くださったみなさま、さらに各種の発表をしてくださった先生方、そして司会をおつとめいただいた先生方に、大会準備委員会を代表し、心より御礼申し上げます。

東京大学の駒場キャンパスは、かつて旧制第一高等学校があった場所です。第一日目の受付には、正門を入れて正面、時計台のある一号館の教室を使い、同じく第一日目の午後に行われました記念シンポジウムは、900番教室(大講堂)にて行いました。この一号館と大講堂は、旧制一高時代から使われ

てきた古い建物です。そして、研究発表は21KOMCEE(21 Komaba Center for Educational Excellenceの略称)で行われました。この建物は、いくつかの大教室やカフェテリアなどを持つ、駒場キャンパスの中でも最も新しい施設の一つです。古い建物から最も新しい建物まで、東大駒場キャンパスの時間旅行をお楽しみいただけたかと思えます。大会の記念写真も、一号館正面の階段を利用して撮影しました。

さて、肝心の研究発表についてですが、今回は第70回大会ということで、理事会から特別なご援助をいただき、海外から先生をお招きした記念のシンポジウムを開催することができました。記念シンポジウムは「世界的視野から見た中国学」と銘打ち、アメリカ・ハーバード大学のマイケル・ピュエット(Michael Puett)教授、そしてフランス・INALCO(国立東洋言語文化大学)のクリスティーヌ・ラマール(Christine Lamarre)教授から、それぞれ「グローバルな視野から中国哲学を考える」、「シノロジーから言語科学まで——ヨーロッパの中国語学の多様性」と題してご講演をいただきました。

ピュエット教授は、中国古代哲学がご専門、最近日本でも『ハーバードの人生が変わる東洋哲学』(早川書房)が刊行され、話題を呼びました。ピュエット教授はご講演で、中国哲学を従来の地域研究の枠組みから解き放ち、



記念シンポジウムの様子



次世代シンポジウム会場風景

哲学というディシプリンの中に置くことによって、新たな哲学的可能性を開くことができるのではないかと提案されました。とりわけ、「在来の理論」に注目することで、中国哲学が普遍的なものに責任を負う新しいあり方について論じられました。

ラマル教授は中国言語学が専門、かつて東京大学の駒場キャンパスで、中国語の教授をつとめておられました。ラマル教授は、はじめにヨーロッパにおける中国語学と中国文学研究のあり方について詳しく解説され、次いで、フランスの最近の制度改革の中で、中国学が従来の地域研究としてのシノロジーを超え、より広い学問編成の中に置かれたこと、そして他者として中国を見ることを離れて、世界と結びついた中国として見ることへと概念枠組みが変化していることを指摘されました。

中島隆博教授が司会を（通訳も）つとめられたこのシンポジウムにおいて、いままさに世界中がその渦の中にあるとあってよい中国学の大きな地殻変動の時期に、非中国語圏に属するアメリカとフランスにおける中国学の

現状をお話いただいたことは、やはり非中国語圏にある日本において、これからの中国学がいかにあるべきかを考える上で、重要なヒントになったのではと思います。会場からも多くのコメントや質問が寄せられ、なかなか充実したシンポジウムになりました。

本大会では、通常の研究発表に加え、前回、前々回の大会に引き続き、次世代シンポジウムを行うことにいたしました。募集を行ったところ、幸い二件のご応募をいただくことができました。大会二日目午前に行われたのが、広島大学の佐藤大志教授をコーディネーターとする「いま『文選』を読む——中国古典文学の規範とその距離——」でありました。本パネルでは、佐藤大志「規範／古典としての『文選』——趣旨説明にかえて」にはじまり、陳獅（広島大学）「李白・杜甫の詩歌創作における『文選』の受容——「静夜思」と「春望」を例として——」、中木愛（龍谷大学）「作品と李善注の距離から考えること——殷仲文「南州桓公九井作」（『文選』巻二二）の「廣筵散汎愛、逸爵紆勝引」句をめぐる——」、高西

介介（高知県立大学）「語られる『文選』」、川島優子（広島大学）「明代の『文選』——凌濛初編『合評選詩』を中心として——」の五つの報告が行われました。『文選』が編纂された六朝の時代から明代に至るまで、また詩歌の世界ばかりでなく小説の世界に至るまで、中国文学における一つの規範的な選集としての『文選』の持つさまざまな姿が浮かび上がり、『文選』が決して六朝文学研究者の専有物ではありえないことをお示しいただきました。

大会二日目午後に行われたパネルが、京都府立大学の小松謙教授をコーディネーターとする「武人・武官と文学」であり、井口千雪（九州大学）「武定侯郭勛と通俗白話歴史小説」、小松謙「武人・武官と白話文学」、松浦智子（神奈川大学）「武人の物語と現実社会の動き——環流する虚構と現実——」、岡崎由美（早稲田大学）「演じる武芸、物語る身体——武術・芸能・武戯」の四つの報告が行われました。たしかに『三国志演義』にしても、また『隋唐演義』や『楊家将演義』にしても、武人が主人公になっているといえはいるわけですが、一般に文の国と思われている中国において、武人・武官と文学の関わりについては正面から考えられてきたとはいえませんでした。このパネルでは、物語内容ばかりではなく、作品そのものの成立や流伝に、武人・武官が深く関わっていたことが示され、武と文学とのきわめて深い関わりが明らかにされました。

今回行われた二つのシンポジウムともに、これまで見過ごされていた問題に光をあて、さらなる研究の可能性を示された意欲的な内容で、どちらも大教室がいっぱいにな

るほどの聴衆を集めました。通常の研究発表に加え、こうした意欲的な発表の機会が増えて行けば、学会の大会はより活気づくのではないかと思います。両シンポジウムでご発表くださった先生方に厚く御礼申し上げます。

本大会では、哲学・思想部会で6件、文学・語学部会で18件、日本漢文部会で7件の合計31件の研究発表が行われました。いずれの部会、いずれの発表においても、多くの参加者を得て、活発な議論が行われておりました。大会を準備するにあたって、一つの大きな仕事は、司会者の依頼でした。発表の司会をお引き受けいただいても、旅費が出るわけでも、参加費が免除になるわけでもなく、まったく手弁当のお仕事です。各発表の司会をお引き受けいただいた先生方には、重ねて御礼を申し上げたいと思います。

日本中国学会の大会は、すべて会員会費、参加費によって運営されています。今回大会の開催をお引き受けして、学会活動が、会員諸氏の自発的な参与によって支えられていることを身にしみて感じました。どこかに大スポンサーがあって、懇親会もただ、発表者、司会者には交通費や宿泊費も出る、といった会も悪くはないのかもしれませんが、会員全員が大会の支持者であるというこのスタイルのよさは捨てがたいように思います。これからも、より多くの会員の参加によって、大会がますます盛んになっていくことを願っております。

第一日目の晩には、キャンパス内のコミュニケーションプラザ（生協食堂）において懇親会が開かれました。ここは、かつて旧制一高以来の駒場寮があった場所です。懇親会も、200名を越えるみなさまにご参加いただき、なかなかの盛況でした。懇親会では、第70回を祝して鏡開きが行われ、池田知久元本学会理事長のご発声による乾杯の後、歓談の時を過ごしました。今回は院生会員の懇親会費を半額にしたこともあり、若い方の参加も多かったようで、学会の明るい未来がうかがわれたように感じました。

最後に、本大会準備会を代表し、あらためて多くのみなさまに御礼申し上げます。どうもありがとうございます。



懇親会での鏡開き